

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト  
平成27～29年度

## 成果報告書

(概要)

本県では、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」と「校内研究の充実」を2本の柱として、本プロジェクトに取り組んだ。授業で「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、校内研究で、教員の資質や能力を向上させることが必要であり、このことが児童生徒の資質能力の育成につながると考える。

特に、付けたい力を明確にし、育てたい具体的な子どもの姿（深い学びの子どもたちの姿）をもとにした校内研究の活性化を図ることに重点を置いた。

滋賀県教育委員会では、滋賀県総合教育センター、滋賀大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）等と連携し、実践フィールド校の研究を支援するとともに、本県事業と連携し、本県全体の授業改善の推進も図った。

研究の成果により、教員の資質能力の向上に効果のある校内研究のモデルを構築するとともに、実践フィールド校の教員の、授業改善への意識の向上、深い学びの実現につながる教科指導力、授業を分析する力、子どもの姿をとらえる力等の向上を図ることができた。

(推進地域) 滋賀県彦根市

(実践フィールド校) 彦根市立金城小学校・平田小学校・中央中学校

平成30年3月

滋賀県教育委員会

## 1. 本事業の背景

児童生徒の「生きる力」の育成のため、特に学力については、「基礎的な知識・技能」「思考力、判断力、表現力」及び「主体的に学習に取り組む態度」の三要素から構成される「確かな学力」を育てることを目指し、各学校では、教育目標や内容を見直すとともに、子どもたちの主体的な学びのサイクルを作り出すことをめざして授業改善に取り組んでいる。

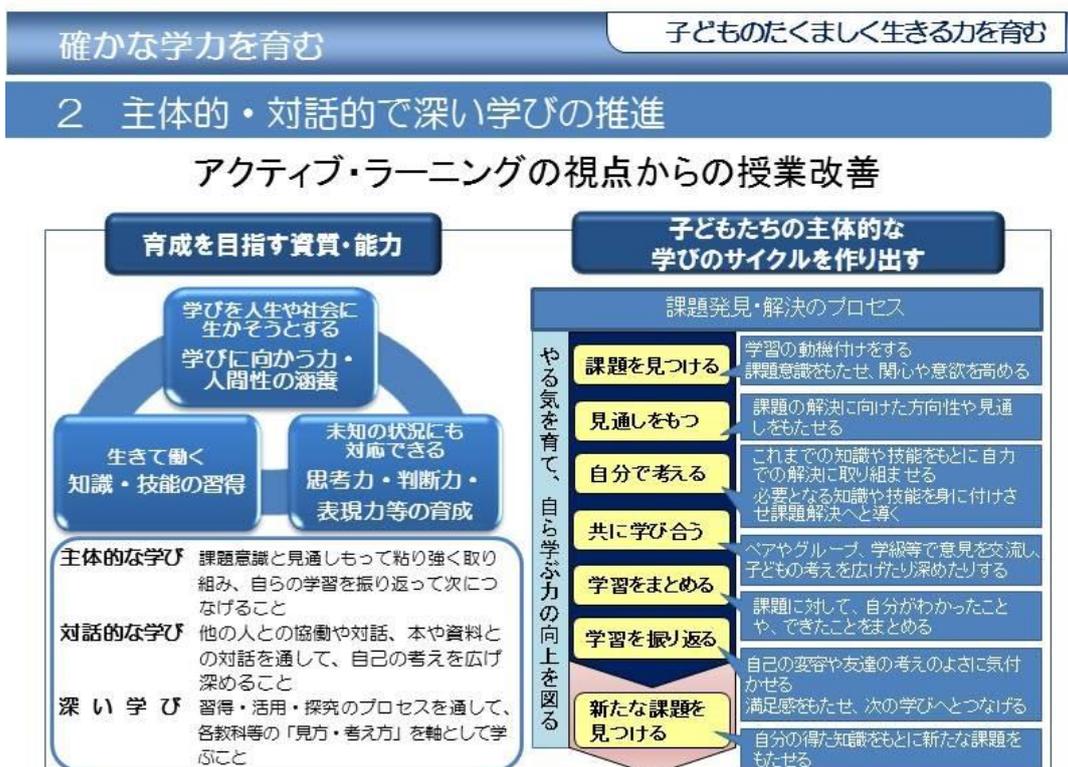
平成26年度の全国学力・学習状況調査の結果から、子どもたち自身に「できた」「わかった」という実感のある授業が十分に実現できていないこと、学年間や教科間連携がさらに必要であること、また、家庭での学習習慣の定着をはじめとした児童生徒の学習状況にも課題がみられた。

そこで、仲間と周囲とのつながりを大切にし、自ら進んで学び、自分の将来を真剣に考えることのできる子ども、お互いの良さを認め尊重し、自ら進んで挑戦し、やり抜くことのできる子どもを育てるために、平成27年3月に「学ぶ力向上 滋賀プラン」を策定し、次の6つの視点で取り組むこととした。

- ① 一人ひとりの学ぶ力を高める
- ② 生活の中で学ぶ力をつける
- ③ 繰り返し努力したことを認め能力や可能性を引き出す
- ④ 放課後や家での時間の使い方を考える
- ⑤ 県全体で子どもの力を伸ばす
- ⑥ 授業を改善する

これらの6つの視点のうち、⑥の授業を改善する視点において、「新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト」を、新学習指導要領の全面実施にむけた取組の中核と位置づけ、主体的・対話的で深い学びの実現にむけた取組（図1）を推進した。

図1 本県の取組（「平成29年度学校教育の指針」より）



## 2. 取組方針

新学習指導要領が求める主体的・対話的で深い学びの実現には、学びの質的な転換が必要であり、教員の学びに対する意識の改革が重要と考える。本県では、付けたい力を明確にし、育てたい具体的な子どもの姿（深い学びの子どもたちの姿）をもとにした校内研究の活性化を図ることによる、教員の資質能力の向上を目指した。

### (1) 研究の目的

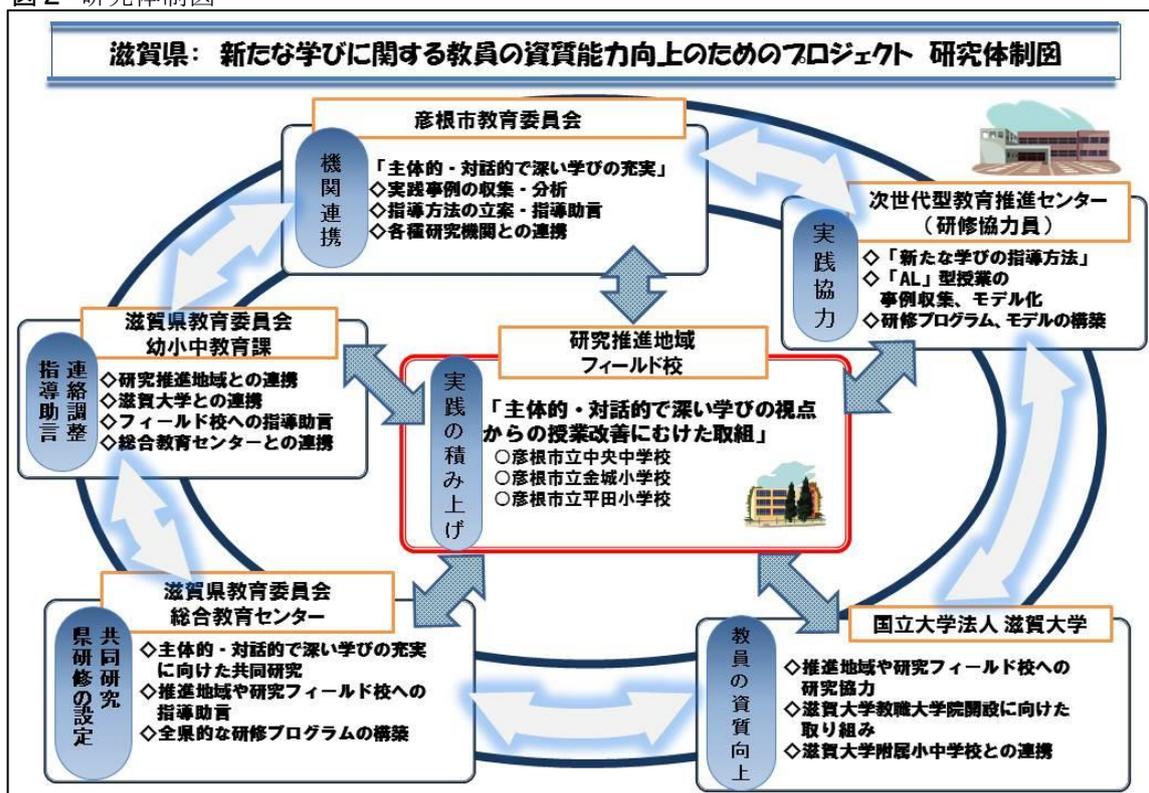
- ・授業改善とともに、教員の資質能力の向上につながる校内授業研究会の活性化の方法や校内体制についての実践的研究を行う。
- ・主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善についての実践的研究を行う。
- ・付けたい力を明確にし、育てたい具体的な子どもの姿のゴールイメージをもつことから、単元(授業)を構想する。
- ・課題解決に向けた探究活動や、言語活動の一層の充実など、主体的・対話的に深く学ぶ、学びの質を高める授業改善を推進する。
- ・授業改善にあたっては、子どもたちの主体的な学びのサイクルを作り出し、やる気を育て、自らの学ぶ力の向上を図る。

### (2) 研究体制について

研究推進地域および実践フィールド校に、県教育委員会事務局だけでなく、滋賀県総合教育センター、滋賀大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）等が支援できる研究体制を構築し、研究を進めた。図2は、本県の新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクトの研究体制を図に示したものである。

また、本プロジェクトの研究成果を、県内小中学校へ普及するため、本県事業との連携を図った。

図2 研究体制図



#### ① 滋賀県教育委員会との連携

本プロジェクトの実践フィールド校を、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善における先進校として位置付け、研究推進のモデルとした。

- ・本プロジェクトの実践フィールド校は、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善における先進校として、公開授業を積極的に開催した。本県の事業の研究校が、実践フィールド校の公開授業と校内研究会に参加することにより、校内研究会の工夫のしかたや、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の実際について学び、研究校の取組に生かせるようにした。
- ・滋賀県教育委員会、滋賀県総合教育センターの指導主事等が、彦根市教育委員会と連携し、指導案検討会から参加したり、研究協議会等で指導助言をしたりして、実践フィールド校の研究の支援を行った。
- ・本プロジェクトの各機関の関係者で構成される連絡協議会を、年に複数回開催し、具体的な方針を確認するとともに、各実践フィールド校の研究の進捗状況を交流して協議を行い、研究を推進した。
- ・本県の事業の実践研究校の講師や、県総合教育センターの研修や研究の講師に、次世代型教育推進センターへの研修派遣教員（以下：研修協力員）を積極的に活用した。
- ・次世代型教育推進セミナーを、本県の「学ぶ力向上実践交流フォーラム」と兼ねて開催し、次世代型教育推進センターや実践フィールド校の事例発表による研究成果の普及を図った。

#### ② 研修協力員と県総合教育センターとの共同研究

- ・次世代型教育推進センターの「研修プログラムモデル案」について、県総合教育センターや実践フィールド校等において実証を進め、有効な研修プログラムとなるよう研究した。

#### ③ 滋賀大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）等との連携

- ・実践フィールド校の公開授業に、教職大学院生が参加し「校内研究・校内研修の理論と実践」のフィールドワークを行った。
- ・実践フィールド校での授業をビデオに撮り、研究材として活用するとともに、大学での講義等で活用した。
- ・研究指定校の要望により、教授等が研究指定校の校内研究会の講師として、取組についての指導助言等の研究支援を行った。

#### ④ 研修協力員と滋賀大学附属小中学校との共同研究

- ・次世代型教育推進センターの指導を受けながら、滋賀大学附属小中学校での教育研究が充実するように、滋賀大学教育学部と県教育委員会との連携により研究を進めた。

### (3) 推進地域（彦根市教育委員会）の取組について

教育委員会から市内全体に授業改善に対する意識を高めるための指導が不可欠であると考え、以下のような機会を利用して、取組の周知および普及に努めたことにより、市内小中学校における主体的・対話的で深い学びの実現にむけた授業改善を推進することができた。

#### ○彦根市教育委員会主催の教員研修等での本プロジェクトの活用

- ・中堅教諭等資質向上研修

研修を実践フィールド校で開催し、公開授業および協議会へ参加することを通して、主体的・対話的で深い学びについての見識を深めた。

- ・校園長会や教頭会、教務主任会

研究協力員を講師として招聘し、実践フィールド校の研究成果を伝えるとともに、学習指導要領改訂の方向性および主体的・対話的で深い学びについての研修を行った。

- ・教科主任会、市内各小中学校の校内研究会等

彦根市教育委員会指導主事等の指導助言では、主体的・対話的で深い学びについて、実践フィールド校での実践を具体的に示して紹介し、深い学びの姿について協議するとともに公開授業への参加を勧めた。

- ・彦根市教育委員会指導主事等による市内の小学校で師範授業

実践フィールド校での研究成果をもとに、市教育委員会指導主事等が市内の小学校で師範授業を行い、主体的・対話的で深い学びについての指導助言を行った。

## 2. 3年間の取組の成果

### (1) 実践フィールド校における児童生徒の変容（全国学力・学習状況調査の結果から）

図3は、全国学力・学習状況調査児童質問紙調査の「国語の授業の内容はよく分かりますか」「算数の授業の内容はよく分かりますか」の質問項目における、全国と実践フィールド校（小学校2校）の差の経年変化を示したものである。

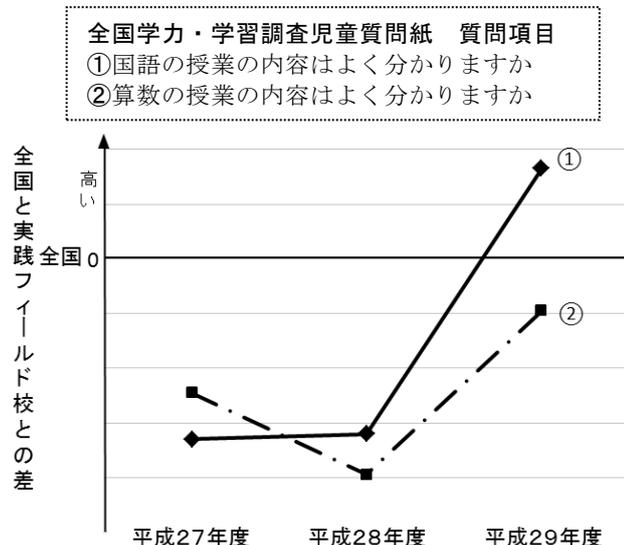
全国の数値を縦軸の0として、平成27年度から平成29年度までの各質問項目の実践フィールド校（小学校2校）の値の差を折れ線で示した。

国語科、算数科ともに、全国と比べて差が小さくなり改善されている。これは、実践フィールド校の授業改善の取組により、子どもたちがわかった、できたと実感できる質の高い授業が実践された成果であると考えられる。

図3 全国学力・学習状況調査 児童質問紙調査における全国と実践フィールド校（小学校2校）の差の経年

・各質問項目の回答割合に、以下に示す点数をかけて合計し算出した数値をもとにグラフを作成している。

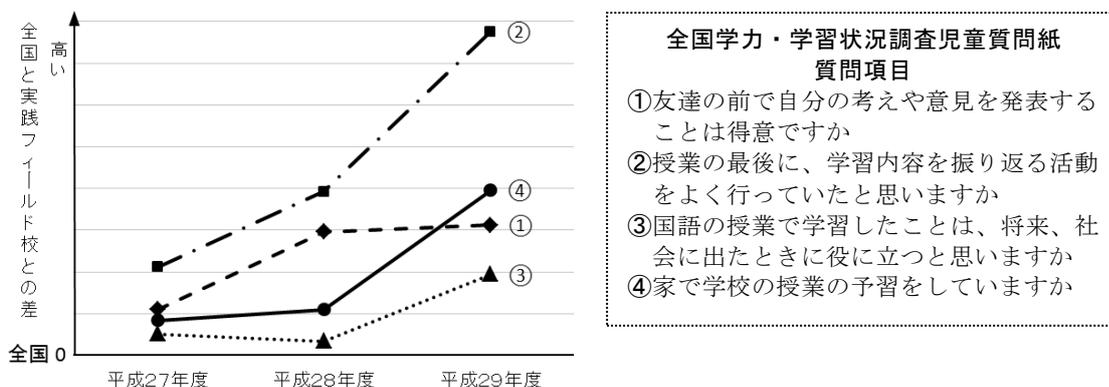
※「当てはまる」4点、「どちらかといえば当てはまる」3点、「どちらかといえば当てはまらない」2点、「当てはまらない」1点



その他の子どもたちの変容が見られた項目について、図4に示した。

図4 全国学力・学習状況調査 児童質問紙調査における全国と実践フィールド校（小学校2校）の差の経年変化

- 各質問項目の回答割合に、以下に示す点数をかけて合計し算出した数値をもとにグラフを作成している。  
※「当てはまる」4点、「どちらかといえば当てはまる」3点、「どちらかといえば当てはまらない」2点、「当てはまらない」1点
- 全国の数値を縦軸0として、平成27年度から平成29年度までの各質問項目の全国と実践フィールド校（小学校2校）の値の差を折れ線で示している。



「めあて」の提示や学びを深める話し合い活動、本時の学びを確認する「振り返り」の時間の設定の効果が見られた。「主体的な学び」により、学ぶ意欲が高まり、家で学校の授業の予習をしている子どもが増加し、「対話的な学び」による自分の考えや意見を発表する機会を増やしたことで、子どもたちの自信にもつながっている。

特に、国語の有用性を感じる子どもが増加した。これは、教科の有用性を感じるような「深い学び」につながる質の高い授業が実現できたことの効果であると考えられる。

また、漢字の読み書きや、文章の読み取り等の力が改善したり、グループでの学びに自然に取り組めるようになったりするなどの子どもたちの姿が見られている。

## (2) 実践フィールド校における教員の変容

上述した子どもたちの変容は、実践フィールド校での校内研究の活性化による、深い学びを実現にむけた授業改善への意識や指導力の向上、授業を分析する力の向上が起因すると考える。

実践フィールド校への聞き取りから、次のような教員の具体的な変容がみられ、教員の資質能力の向上が図れた。

### ○授業改善への意識の向上

- 研究授業直前まで指導のあり方を考えるなど、常に教員自身が追究し続ける姿が見られるようになった。
- 「まず身に付けさせたい力は何か」という言葉が当然のように出てくるようになり、単元で、そして本時で付けたい力をまず明らかにして、その手立てを考えるように授業を組み立てるようになった。

#### ○深い学びの実現につながる教科指導力の向上

- ・問題提示を含めた導入の工夫をすることによって子どもに気付きをもたせ、子どもと教師の間で課題を共有するように努めるようになった。
- ・振り返りの視点を提示したり望ましい振り返りを紹介したりして、子どもが本時の学びを確認し次時への意欲がもてるよう工夫をするようになった。
- ・授業中、子どもが考えを発表する機会を確保するよう努めるようになった。
- ・必然性のある課題を設定したり、期待する正答や誤答を設定した上で子どもの考えの取り上げ方を計画したりするなど、充実した話し合い活動への工夫をするようになった。
- ・子どもの考えをつなげるよう意識し、発問や切り返しの工夫を心がけるようになった。

#### ○授業を分析する力の向上

- ・授業参観での、子どもの姿をとらえる力（子どもの見取り）が身に付いてきた。
- ・授業中の子どもの姿の表れから手立てがどうであったかについて分析する力が身に付いてきた。

#### 4. 教員の資質能力向上に効果のあった取組

実践フィールド校では、付けたい力を明確にし、育てたい具体的な子どもの姿（深い学びの子どもたちの姿）をもとにした校内研究の活性化を図ることによる、教員の資質能力の向上を目指した。

実践フィールド校の取組から、教員の資質能力向上に効果のあったと考えられるものを以下のようにまとめることができる。

○授業で付けたい力を明確にし、育てたい具体的な子どもの姿（深い学びの子どもたちの姿）をもとに、学習指導案の作成を行い、事前検討会、授業後の研究協議会が行われた。

○研究授業の参観では、観察する児童生徒を参加教員で分担して記録を行った。

○研究協議会では、授業分析が深まるように、目的に合った分析の思考ツール（Yチャート、マンダラチャート等）を活用した。

○研究協議会の協議グループは、3～4名の、研究授業を行った学年や教科の教員と他の学年や他の教科の教員による構成であり、経験年数の多い教員と少ない教員とで構成された。

○研究協議会后、教員の振り返りを行い、個人の振り返りの内容を教員間で共通理解できるよう工夫した。

授業で付けたい力を明確にし、育てたい具体的な子どもの姿（深い学びの子どもたちの姿）をもとに、校内研究を行うことで、子どもの姿をとらえる力（子どもの見取り）の向上が図られ、深い学びを実現する授業への手立てを具体的に考えられるようになった。

また、教員一人ひとりが校内研究の振り返りを毎回行うことで、教科指導力等について、教員自身の現状と課題を改めて認識して、今後の実践する具体的な目標を決める機会となった。

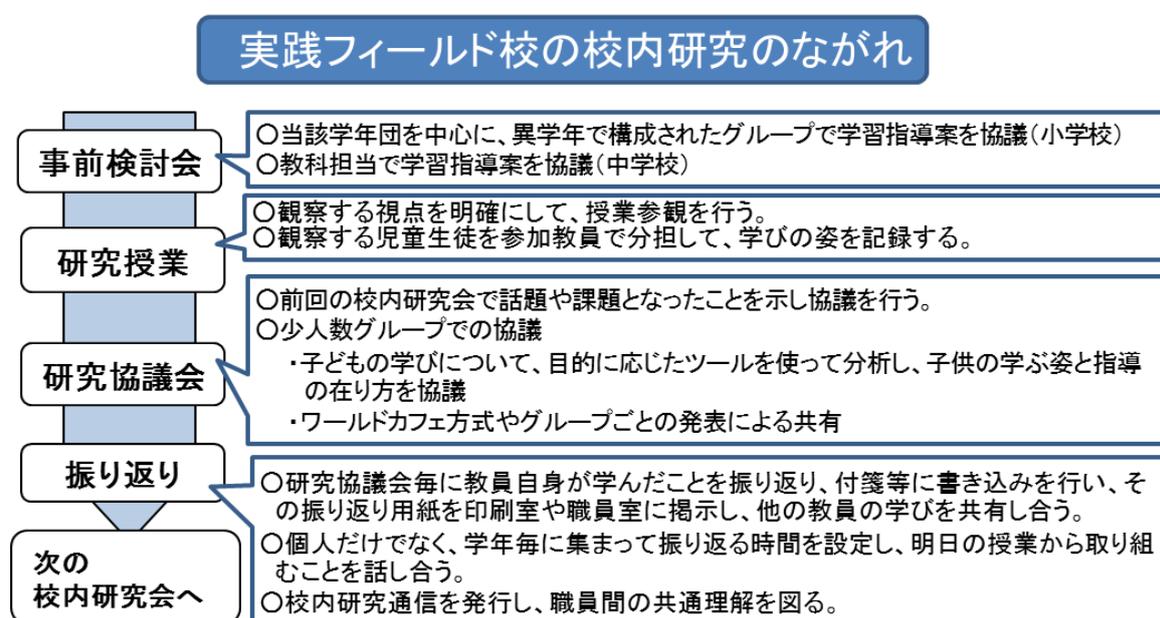
他にも、研究協議会の協議グループの構成を工夫したことで、いろいろな立場からの見方や考え方にふれる機会となったり、経験年数の多い教員の意見が、経験年数の少ない教員への育成につながったりといったOJTとしての効果も見られた。

これらのことにより、質の高い授業が実践できる教科指導力の向上につながり、日々の授業改善につながったと考えられる。

### (1) 実践フィールド校の校内研究の取組

実践フィールド校は、校内研究会を「事前検討会」「研究授業」「研究協議会」「研究協議会の教員の振り返り」といったながれで進めている。図5は、実践フィールド校の校内研究のながれをまとめたものである。

図5 実践フィールド校の校内研究のながれ



### ○「授業のチェックポイント」の実践を通して授業改善を実現する取組(中央中学校)

授業研究グループを文系(国語、社会)、理系(数学、理科)、実技系(外国語、音楽、保健体育、美術、技術・家庭、養護教諭)の3つの部会に分け、授業研究を進めた。

授業者は、滋賀県教育委員会が示した「授業のチェックポイント」(図6)を手がかりに授業を構想し学習指導案を作成した。

授業参観では、観察する生徒を参加教員で分担して指定した上で、参加者が付箋に良かった点と改善点を記入し、授業後の研究協議会が深まるように工夫した。

研究協議会では、生徒の姿をもとに、教科等が混合になった3~4人程度の小グループで行うことにより、協議の質的な向上を図った。良かった点や改善点を書いた付箋を出し合いながら、その手立てが有効であったかについて、「授業のチェックポイント」の項目にそって話し合い、マトリックス(表)を用いて整理した。

図6 授業のチェックポイント  
(「平成29年度学校教育の指針」より)

授業のチェックポイント	
<input type="checkbox"/>	児童生徒が自ら問いや課題を発見できるような教材や発問、導入であったか
<input type="checkbox"/>	児童生徒が自力解決に取り組むことができるように、見通しをもつ時間を設定したか
<input type="checkbox"/>	児童生徒が思考・判断する時間は適切であったか
<input type="checkbox"/>	ペア学習・グループ学習等をするねらいや、話す観点は明確であったか
<input type="checkbox"/>	児童生徒自ら本時のまとめが書けるように、本時のねらいにせまる発問や板書等の工夫をしたか
<input type="checkbox"/>	児童生徒自らが本時の学びや新たな課題が見つかるように、振り返りの視点を設定したか

### ○3つの学びの確かな見取りを授業改善につなげる取組<平田小学校>

国語科の研究を中心に、校内研究に取り組んだ。国語科の学びが、他教科等にどのようにつながるかを指導案の単元計画に明記し、学校がめざす資質・能力の育成の実現に向けて、教科等横断的な視点をもって授業改善に取り組んだ。

研究協議会では、前回の話題や課題となったことを初めに示すことにより、話合いの視点が共通理解され、話合いを通して追求していこうとする意識も高まった。図7のように、授業の質的改善のため、Yチャートを使って子どもの学ぶ姿を3つの視点で分析し、教師の手立てと結び付ける協議を行い、めざす子どもの姿や有効な手立てを共有した。

また、Yチャートに貼られた付箋の枚数などから、深い学びの実現が十分でないことが課題として浮かび上がり、国語科における深い学びの追究につながった。

図7 Yチャートを使った研究協議会のようす



### ○校内研究会を日々の授業実践につなげる取組 <金城小学校>

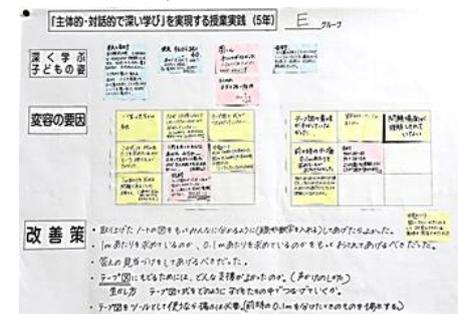
学年等が混合になったグループで事前検討会（事前授業の参観も含む）を行うことにより、他の学年がどのように学んでいるかをお互いに知ったり、専門的な知識や経験をもった教員の意見を聞いたりことができ、学びの系統性や子どもの発達等について、気付いたり考えたりすることができた。

研究協議会では、深い学びを実現していた子どもの姿、実現につながらなかった子どもの姿を付箋に書いて出し合い、マンダラチャートを使って分析し指導のあり方を考えた（図8）。

複数の付箋の中から、グループで協議して1枚を選び焦点化し、その姿を支えた教師の手立てについて考え、めざす子どもの姿と授業づくりのポイントが共有された。授業を分析するとき、注目すべき子どもをグループで絞りその子どもの変容の要因を分析した。さらに、今後の指導のあり方を分析する手法は、分かりやすかった。

研究協議会後の振り返りを、個人だけでなく、学年でも行うことにより、協議で明らかになった授業づくりのポイントを日々の授業改善につなげることができた。

図8 研究協議会で使用したマンダラチャート



## (2) 幼小中連携を図る中学校区における取組

新学習指導要領の全面実施にむけて、系統的に主体的・対話的で深い学びを推進するため、中央中学校区の小中学校と幼稚園等の職員合同の研修会を年間3回実施している。

また、研修協力員を講師として「カリキュラム・マネジメント」についての講演会や、実践フィールド校の平田小学校を会場に授業研究会を実施した。

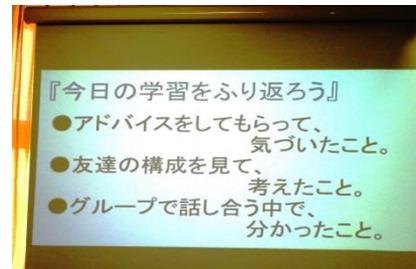
研修会の研究協議会を通して、小中学校と幼稚園等の職員の交流を活発にすすめ、校区内における子どもに育成を目指す資質・能力についての共通理解を図り、系統的に主体的・対話的で深い学びを推進することができた。

## 5. 「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる授業改善の取組

実践フィールド校では、校内研究の活性化を図ることにより、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる授業改善に取り組み、上述したような子どもたちの変容が見られた。

### ○中央中学校の取組

すべての教科において、毎授業の振り返り活動を充実させることを重点項目として取り組んだ。生徒に、1時間の授業でどのような力が身についたのか、また次時への課題は何であることを意識させる振り返りを実施し、深い学びへとつなげられるようにした。



### ○平田小学校の取組

国語科で培った言葉の力が、他教科・領域や日常生活にいきで働くことをめざし、単元で付きたい力を押さえる「学習のゴールの明確化」、交流する必然性をもたせた「目的意識をもった交流」、学習で身に付けた力や思いを振り返りながら書くことにより、学んだ力を生かす場を工夫した「めあてと振り返りの連続性」を重点項目として取り組んだ。



### ○金城小学校の取組

子どもの主体的・対話的で深い学びを支えるために、学びの過程（授業過程）において、「様々な考えについて根拠を明らかにして、その真偽を問う考える力（批判的思考力）の育成を重点課題とし、それにつながる段階として、低学年では「根拠を基に説明する力」、中学年では「比較、関連づける力」の育成を目指すことと整理して実践を重ねた。



## 6. 本事業の成果を生かした今後の取組について

### (1) 本県における成果と課題（全国学力・学習状況調査の結果から）

本県では、本プロジェクトの実践フィールド校を、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善における先進校として位置付けて研究推進のモデルとし、本県の授業改善を推進してきたことにより、以下のような成果と課題がみられた。

#### ○成果

授業スタイルの普及による「話し合う活動」や「振り返る活動」等の機会の増加

#### ○課題

学んだことが役に立つと実感できるような「深い学び」につながる授業改善の必要性

図9は、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙における本県と全国の質問項目の経年変化を示したものである。

小中学校ともに、児童生徒質問紙の「授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」やその他の質問項目の経年変化から、授業スタイルについては改善され普及したことにより、「話し合う活動」や「振り返る活動」等の機会は増加した。

一方で、「国語/算数（数学）の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」については改善が必要であり、教科の有用性を感じるよう社会のしくみと教科での学びを関連づける授業には至っていないなど、「深い学び」につながる質の高い授業にむけた改善を行う必要がある。

## （２）本県の今後の取組

実践フィールド校では、上述したように「深い学び」につながる質の高い授業につながってきている。これは、質の高い校内研究により、教員の教科指導力の向上に起因するものであると考えられる。

本県では、今後も３年間の本プロジェクトの研究成果をもとに、県内全小中学校への学校訪問等により、各校の取組について指導助言を行い、新学習指導要領の全面実施にむけて、質の高い授業につながる校内研究への取組を推進したいと考えている。

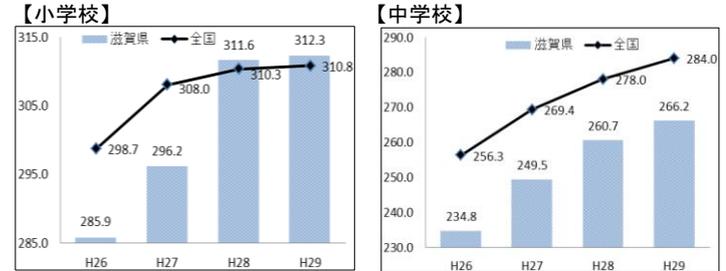
また、来年度からは高等学校主管課とも連携を図り、幼小中高の、主体的・対話的で深い学びについての接続にむけた取組を進めていきたいと考えている。

図 9 全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙の質問項目の経年変化

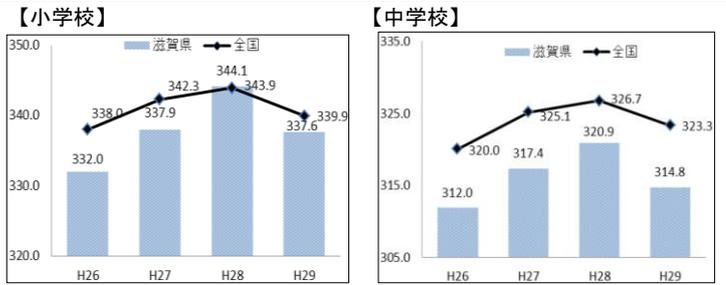
・各質問項目の回答割合に、以下に示す点数をかけて合計し算出した数値をもとにグラフを作成している。

※「当てはまる」４点、「どちらかといえば当てはまる」３点、「どちらかといえば当てはまらない」２点、「当てはまらない」１点

授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか



国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか



算数（数学）の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか

